

夏目漱石

マクベスの

幽霊について



# マクベスの幽霊について



自然の法則に乖離かいりし、物界の原理に背馳はいちし、もしくは  
 現代科学上の知識によりて、闡明せんめいしがたき事物を収めて  
 詩料文品となすことあり。しばらく命名して超自然の文  
 素という。この文素の要用にして操觚そうこ者しやの閑却しあたわ  
 ざるゆえんを述べ、あるいはたとい必須の文素ならざる  
 も、なお詩墨の一角によつて優に科学の包圍れいかんを冷瞰れいかんした  
 る理由を論ずるは、すこぶる興味ある問題にして学徒研  
 鑽の勞に値するものなり。

悲劇マクベス中に出現する幽霊はあきらかにこの文素に属するものなり。ゆえに、これを詳論せんとせばまず如上の問題に明確なる解決を与えざるべからずといえども、ここにこれをきゆうかく究覈するの余地なきをもつて略す。弁証はしばらくおく。一言にしていえば、余はようめいぎゆうだ窃冥牛蛇の語、怪癖鬼神の談、その他のいわゆる超自然的文素をもつて、東西文学の資料としてかつこうなりと論断するものなり。この論を読む者はこれを読むの冒頭において、まず余のこの論断に左袒さたんするか、またはこれを仮定せんことを要す。もししからずして、いたずらに幽霊の登場

の可否を疑議思量せば、索然としてついに落所を失せん。

マクベスは功利の念に急なる人なり。想像豊瞻ほうせんにして詩趣に富めるの人なり。門をいでて左すること一步、ついに馬首をめぐらして右するあたわざる人なり。否、右すること知らざる人なり。精力一代に絶するにあらざるも、豪毅市井の庸児をしのぐに足る人なり。後事を商量して一己の康寧を計るの策において賢明なりというをえざるも、おのが目的を達するに自家賦稟ふりんの推理くふうを費やす人なり。その画策の拙、その経営の陋ろうなるにも関せず、天分の考慮をめぐらしうるの人なり。劇裏悲惨

のこと皆この性格を回転して発展しきたる。主公先天の性またこの鬼哭裏きこくの状況に呼応してその全斑ぜんぱんを露出しきたる。かれの人を殺すや、三たび。栄耀えいようの夢はまくらにつかざるかれの身を追いて弑虐しいぎやくを現実にするのやむをえざるにいたらしむ。空中一口の匕首あいくち、かれを導いてダシカンけいちようの閨帳けいちようために紅なり。かれはその君を殺す者なり。慈仁なるその君を殺す者なり。その君を殺さんと欲してこれを遂行しえたるものの感、はたしていかん。かれはいまさらにその心の平らかならざるに驚けり。耳べに語あり、なんじ眠るあたわずという。双手に血痕あり、



潮海万斛ばんこくの水を傾くるも、これを洗うに由なきを知る。ただかれは眠らんことを要す、またその血をあらわんことを要す。これを要するの極、これを得るの術を講じて、進むに道あり、退くに道なきをさとる。地下に眠るの安きを知らず、おのれが血をもつてわが罪を洗うのやすきにつかざりしかれば、あくまでも人の眠りを奪って眠らざればやまず、人の血をそそいでわが手を清めずんばやまず。ここにおいてか、二たび人を殺し、三たび人を殺す。ダンカンを殺して眠るあたわず、ゆえにバンコーを殺す。バンコーを殺してその手ますます赤し、ゆえにマ

クダフの一族をほふる。はじめに一步を誤りたるかれの欲するところは、ただ靈精一点の安慰にあり。この安慰を得るの唯一手段として、かれの選びしは殺人術なり。かれはこの術を講ずるうえにおいて、またこれを実行するうえにおいて終始一貫して変わらざるものなり。ダンカンだいきょうを殺すのち、バンコーばんこうをを殺すの夜、大饗だいきょうの席宴樂の堂において、かの有名なる幽靈は場に上りきたる。その現出すること前後二回。後代の学者これを論評することつまびらかにして、異説またこもごも起こる。あるいはいはいう、まえにいずるものはダンカンの亡靈にして、

のちに現わるる者はバンコーの幽鬼なりと。あるいはいはいう、前者こそバンコーにして、後者はダンカンなりと。第三者はすなわちいう、まえなるもあとなるもバンコーの怨霊に別ならずと。この一編の主意は、諸家の論弁を批評して、余が幽霊観を演述し帰着しえたる断案を具して、おおかたの教えを請わんとするにあり。

今この考案の要領を明らかにし、塗抹汚染とまつの弊を避けんがためにこれを三個に區別し、順を追うてこれを解決せんとす。一、この幽霊は一人なるか、また二人なるか。二、はたして一人なりとせば、ダンカンの霊か、バンコ

一の靈か。三、マクベスの見たる幽鬼は幻想か、はた妖怪か。第一と第三は、単に第二に付帯して生ずべき疑問にすぎず。この考案の根蒂こんていとも見るべきは、第二にあつて存す。

(一)、諸家の論評中ダンカンを離れ、バンコーを離れて、単にこの幽霊は一人なりやはた二人なりやを説ける者なし。したがって、学者の説をあげてこれを弁せんとするときは、勢い第二の問題を犯さざるをえず。ただ、ナイトとシーモアあり、一言これに及ぶ。ナイトいわく、マクベスが宴に臨んで、バンコーのあらざるを惜しむその

せつなにおいて、バンコーの霊が再び場に上りきたるは、  
芸術の極致にあらずと。シーモアいわく、同一の幕に、  
同一の物が再現したりとて、畏怖の念、悩乱の度をいく  
ばくか高めなんと。これその幽鬼のなにもものたるを論ぜ  
ず、少時間内において同一の亡魂が再度出現するは美的  
ならずとの意見にほかならず、吾人をして二人の言に首  
肯せしめんとせば、あらかじめ吾人をして同所に同事を  
再度繰り返すことの非なるを認識せしめざるべからず。  
しかも、吾人はこの命題の真なるを疑うものなり。重複  
を避くるの美なると等しく、重複そのものもまた美なる

ことあればなり。文芸は感興をひくの具なり。詩歌行文にして感興を催さざらんか、重複を避くるもなんの益あらん。もし、重複あるがために精彩一段を添え、滋味半嚮ほんれんを加うるを得ば、重複は多々ますます弁ずるの具にして、文芸の極致時ありてかここに存す。詩に韻脚あるは、一種の意義において重複なり。文に照応あるまた一種の意義において重複なり。修辭にクライマックスあり。これまた一種の意義において重複なり。小説に主人公あり、女主人公あり。全編を貫串かんかんして出頭しきたる。あきらかに一種の重複なり。ゆえに、マクベスの亡霊について吾

人の考慮すべきは、その重複するやいなやの点にあらずして、重複せば感興を毀損きそんするやいなやの点にあり。今一步を譲って重複は非美なりとするも、マクベスと亡霊との関係は純乎じゆんこたる重複にあらざるをいかんせん。ナイトとシーモアはただ亡霊のみを眼中に置く。ゆえに、同一の亡霊が再度出現するを見て重複なりと判ず。しかれども、この光景の焦点は亡霊のみに存せざるをいかんせん。マクベスは劇中の主人公にして、かつこの光景の主人公なり。満堂の観客はマクベスを中心として視線をこゝこ殺人漢の心意、表情、言語、動作に凝集す。もしマク

ベスの心意表情言語動作にして、第一の霊を見るとときと第二の霊を見るとすんごうきにもうじやにおいて寸毫の差異なく、しこうして寸毫の差異なき亡者が再現するとせば、これ真の重複なり。されども、吾人の心意は瞬間に流転し、せつなに推移す。流るる水の旧時に似て旧水にあらざるがごとし。尋常茶飯裏の生活なおかくのごとし。いわんや、詩的なマクベスをや。また、いわんや衷懷平衡を失し、危機眼前にせまるかれの境遇ようえいにおいてをや。必ずやかれが心の機微に動きて外に揺曳ようえいするところのもの、あるいはその程度において、あるいはその種類において前後変化の



観客に認めらるるものあらん。吾人が全幅の中心として、活画の主人公として凝視諦観する、マクベスの上に如上の变化ありて、場中の客皆その变化を認めうるとせば、幽霊の重出は単に副景の重出にして、全般の興懐に関することなし。くわうるにその配物なる幽霊の重複すら、無意義の重複にあらずして、焦点に活動するマクベスの心裏に反響すること、新たに異様の幻怪を挿入して一点の凄気<sup>せいき</sup>をつづるにまさること疑いをいるべからざるに似たり。(第二問に説くところを見よ) もしそれ人ありて金に告げて、リチャード三世は十一人の男女を殺して、

十一人の靈魂を見たるがゆえに、ダンカンとバンコーを殺したるマクベスも、また二人の幻怪を堂中に認めざるべからずといわば、答えていわん、十一人の男女は各自の意向に従いてリチャードのまくらべに立ち、マクベスの毒手に倒れたる三者の二人は、無精にして冥土より娑婆にいできたるをめんどうと思ひしがためならんと。

(二)幽霊の一人にして事足るは、まえに述べたるがごとし。さらば、その一人の幽霊はバンコーかダンカンか。これ次に解釈すべき問題なりとす。

千八百三十六年、コリアーさおう沙翁さおうに関する一書を著わし

て、医師フォーマンの記録を公けにす。そのうち千六百十年四月二十日のくだりに、この悲劇に関する記事あり。けだし、かれは当夜グローブ座にてマクベスを見、帰つてその状況を草したるなり。その一節にいわく、この夜マクベスは大いに臣僚を会して宴を張り、バンコーもこの席にあらばなど残り惜しげなるさまなり。さて、マクベスは諸人のために祝杯をあげんとて席を立ちけるが、そのひまに幽霊は席に入りて、マクベスの背なるイスに座しぬ。マクベスは再び席にかえらんとふり返りて幽霊と顔見合わせ、畏怖と憤怒のあまりバンコーを殺せるこ

とにつきて喋々ちようちようしければ、諸人もはじめてバンコーの

この世にあらぬを知り、はてはマクベスを疑うにいたりぬ。この記録によりて事実上疑問の一半は解釈せられたりといふも不可なきがごとし。されども、事實は事實なり。劇の興味が事實以外において増減しうるとせば、これに向かつて論評を加うるは、批家適當の義務にして、かつフォーマンの記録は単に事實前半を摘出したるにすぎず、ここにおいてか、諸家各自の意見をたたかわして相下らず。

第一の幻怪をダンカンとなし、第二の幽魂をバンコー

となす者あり。シーモアおよびハンターこれなり。前者  
いう、マクベスの良心を刺激し、その非挙を悔いしむる  
ものは、慈仁寛厚のダンカンか、はた同輩なるバンコー  
かと。思うに、この説をなすものは、吾人の心理作用を  
知らざるものなり。人大事を忘れて小事を念頭に置くこ  
とあり。父母の病に走らずして碁にふけるがごとし。眼  
前の丐児かいじに半銭を与えて、故郷の妻子を閑却するがごと  
し。半夜火あり、なんじが家にせまるとき、なんじの意  
識はこの火災のために占領せらるべきか、はた去年破産  
せるなんじの銀行にあるべきか。火災はいちじの害、破

産は終生の厄なり。もし大小をもつてこれを論ぜば、両者もとより軒<sup>けん</sup>軽<sup>ち</sup>するの価値なきものなり。しかれども、なんじの心はこれを忘れてかれにおもむくは何ぞ。目前の急なればなり。今ダンカンとバンコーの差は、近火と破産のごくはなはだしからず。しこうして、眼前の急は両者ともに同じ。マクベスの胸裏、大なるダンカンをお忘れて、小なるバンコーを恐る。これ理のまさにかるべきところなり。かれまた言う。マクベスの妖怪をののしる語中に *if charnel-houses and our graves etc.* の語あり。もしダンカンをおさすにあらずんば、この語妥当たら

ず。ダンカンさきに死して今すでに墓中の人なり。ゆえに「墓をいずる」うんぬんの文句に適中すれど、バンコ―は今死せるのみにていずべき墓もなく、見捨つべき塚もなし。もし今幽霊をバンコーなりとせば、この句はいかにして説明するをえんと。この説もとより一理なきにあらねど、要するに文字上の理屈にして、酷評をくだせば、言句に拘泥こうでいせる訓詁家くんこかの説というべし。マクベスはまえに述べたるごとく詩趣に富める人なり。ゆえに、その言語の情に激して噴薄するや、常に天来の警句となつて流出しきたる。がれの *charnel-house* の一語のごとき

は、もつともそのきばつなるものなり。墓は常に死と連想せらるるものなり。今死せる者が幽鬼となつて娑婆<sup>しゃば</sup>世界を彷徨するとき、詩的にこれを形容して墓死<sup>し</sup>屍<sup>し</sup>を吐くという。すでにその適切なるを見る。その死屍の葬られたると葬られざるとは、吾人の問うところにあらざるなり。単に吾人のみならず、これを口にするもの自身の問うところにあらざるなり。かつ、この思想たる沙翁にあつて珍奇ならず。『ハムレット』中に、

"The graves stood tenantless, and the sheeted dead  
Did squeak and gibber in the Roman streets"



なる句あり。されば、すでに死したるものの幽霊を、ばくぜんと「墓よりいできたる」と言えりとみて不可なきがごとし。かれまた言う、マクベスの夫人に告ぐる語中に *If I stand here I saw him* なる言あり。夫人はこの時いまだバンコーの死を知らず。知らざるものに向かつて単に *him* という、なんらの意義なし。ゆえにこの *him* なる名詞は夫人の共謀して殺せる、ダンカンにほかならずと。この説また事機に通ぜざるの論なり。人を見て法を説くは日常談笑の際にのみ行なわるべき法則なり。すなわち、吾人が言語の方便を用いてその意思を人に通ずる

とき、わが言語の相手に了解せられうるやいなやを考え、これを斟酌し、これを選択しうるの余裕ある場合にのみ適用すべきものなり。とつさ倉率の際は、人ただおのれのみを顧慮するにすぎず。念頭一微塵みじんの人に関するあるなし。いづくんぞ、他のわれを解すると否とを問わんや。昔一友あり、英人某と争う。争うとき、かれの片言隻辞を聞きえず。しこうして、かれは平生この英人の授業を受け、日々その講義を筆記せる男なり。見るべし、この講師は平生の手かげんを忘れて驀地ぼくちにわが友に呐喊とっかんしたるを。今マクベスの場合いかんと考えよ。かれは平生の

マクベスにあらざるなり。情緒惑乱し、心胸鼓動す。かれの脳漿は沸々として声をなす。この時にあたりて、ただちにバンコーをさして him と言わば、夫人はこれを解しがたかるべしと、冷静に分別をめぐらしうるの理あるべからず。否、夫人の解しうべからざる him なる語を放下するがゆえに、かれの心裏の反響と見るべきこの唐突の一語が、一段の趣味を付加し、周囲の状況と映帯の妙をきわむるにあらずや。かつ、不可解は秘密を意味す。秘密は時あつてか猛勢なる文学的結果を生ず。吾人は狂人の唸<sup>がんげい</sup>嚙を聞きて解するあたわざるに苦しむ。解す

るあたわざると同時に、その解するあたわざるあたりに  
おいて、一種言うべからざる悽愴せいそうの感を生ず。深夜人静  
ま<sup>ばんらい</sup>つて万籟休むとき、忽然隣床に臥する者呵々かか大笑す、  
吾人はその何の意たるを知らず。ただこの何の意たるを  
知らざる体の笑裏に、無限の鬼気あるを思え。マクベス  
が他に解しがたき *him* なる言を、当面錯過の瞬間に口  
外するは、かれの心状を発露するに最も適當なる方便な  
り。また、これを口外したるがため、ぼうぜんたる傍人  
の心に反射して、一種の薄気味悪き感を起こさしむるも  
また、作者くふうの一端と見るべし。

ハンターの第一幽霊をもってダンカンなりとなすの理由もまた、*charnel-house* うんぬんの句に存すれば、重ねてこれを論ぜず。第二の幽霊をもってバンコーとなすは、マクベスが幽霊に向かつて *Or be alive again, and dare me to the desert with thy sword* と言へるによる。かれ言う、この句によりて推測すれば、平易温厚の王者にあらずして悍かんきよう驕傑張なる武士の怨霊と思わると。余はもとより双方の幽霊をもってダンカンにあらず、バンコーなりと主張する者なれば、この説を駁はくするの必要なきに似たりといえども、単にこの句より推してこの結論

に達するは、すこぶる薄弱なりと言わざるべからず。マクベスは生けるダンカンに戦いをいどむにあらず。生けるダンカンは寛厚の長者なり。されど、いかに君子の幽霊なればとて、温風のごとくに出現するの道理なし。少なくとも、みずから手をくだしたるマクベスにしかく見ゆべきにあらず。したがって、刀矢の家に生まれたる男子が、これをさしまねいて剣光のもとに雌雄を決せんとするは、必ずしも不可なきに似たり。余ゆえに思う、ハントーの説は、第二の幽霊をバンコーたらしむるうえに、さまでの功力なしと。

以上の二家に反して、第一をバンコーとし、第二をダ  
ンカンなりと思惟する者をナイトとす。第一の論拠は、  
*twenty trenched gashes on his head*をこうむって倒れた  
りと伝えられたる、*バンコー*にマクベスの句中にある  
*twenty mortal murthers on their crowns* という文辞がよ  
くあてはまるといふにあり。要するに、これもまた言句  
の議論にすぎず。されど、単にこれをもってバンコーな  
りと論断するの大早計なるはもちろんなれど、この断論  
を鞏固きょうこうにするうえにおいて、多少の力なしというべから  
ず。かれの第二の理由にいたっては、容易に首肯しがた

きものあり。その大要にいう。初現の幽霊と再現の幽霊に對する態度のうえにおいて、マクベスの言語に變化あるを見る。すでにその言語に變化ある以上は、同一の幻怪に對するものと断定しがたし。かれの初霊を見て驚怖せるをとがめて、きみも丈夫ならずやと夫人の語りたるに答えて、「しかり、しかも豪胆なる丈夫なり、鬼をおののかしむる者を熟視するからは」といえり。しかるに、第二の幽霊に對しては 'Avant! and quit my sight!' といふ 'Take any shape but that! ぬんぬ' または 'Hence, horrible shadow!' といふ。すべてこれ傾倒激越の辭にし



て、これを前段に比するに、いっそうの熱氣を加う。これ第二の幽霊は第一よりも<sup>どうもう</sup>獰猛凶悪なるがためならん。これを弁論せんには、再び心象の推移なる問題に入らざるべからず。ナイトは動きうる幽霊を見て、動きうるマクベスを見ず。心的に dynamic なるマクベスは、かつてかれの眼中に入らざるなり。吾人は両個の幻怪をこの光景上に<sup>てんてつ</sup>点綴しうると同等の容易さをもつて、二個のマクベスを描写しうることを忘るべからず。ゆえに、他の理由ありて、この幽霊は一個にして二個にあらずと断論しうるときは、いきおい動く者はマクベスなりと言わ

ざるべからず。しこうして、この中心点たるマクベスの動くは、副景たる幽霊の動くよりも劇全体の生命を活動せしむる点にかいて、効果あるはもちろんなり。さらば、マクベスはこの活人画裏にいかに動き、いかなる丹碧たんぺきの彩華によりて、順次にこれを色どりしか。余思うに、マクベスの変化は流水の低きにつくがごとく、楓葉ふうようの秋を染むるがごとく、自然の理をきわめたるものなり。人あり髪を引きてなんじにたわむる。なんじ微笑して過ぎん。頃刻けいこくののち、かれまたなんじの髪を引く。なんじ笑うことをやめて澁面を作らん。三たび四たびにいたって、な

んじ憤然として立ちてかれをうたん。かれのなんじにた  
 わむるるや、その動作において、その程度において、前  
 後ごうも異なるなきなり。しかれども、なんじの微笑は  
 変じて渋面となり、ついに殴打となる。これ動く者かれ  
 にあらずして、なんじにあるなり。マクベスはもとより  
 斗大の胆を有する空世の偉人にあらずといえども、その  
 英挺悍<sup>えいてい</sup>励<sup>かんれい</sup>の氣、優に尋常一様の鈍<sup>どん</sup>瞎<sup>かつ</sup>漢<sup>かん</sup>を抜くに足る。ゆ  
 えに、その幽鬼に対するや、常に畏怖と憤怒の間に彷徨  
 す。かれはおのれの殺戮せる旧主旧友の影を、髣髴<sup>ほうふつり</sup>裏に  
 認むるを恐る。しかも、同時にかれらのおのれを侮蔑し、

その死屍冷骸を動かして、あえてわが面前にいできたるを憤る。かれの第一幽霊を見るや、畏怖の念憤怒の念にまさる。その去って再び来るや、憤怒の念畏怖の念にまさる。ひとたび消えたる亡者もうじやを送りて、胸中の波瀾まさに収まらんとするに臨みて、またまえと同じき亡者に接す。亡者はマクベスをして瞬時の安心を得せしめんがためにことさらに退却し、ようやく安心を得んとするときまた急に立ってその虚をつく。これ最初より退却せずしてマクベスを睥睨へいげいするよりも皮肉なるやりくちなり。あくまでかかれを愚弄せる手段なり。勇悍ゆうかん氣を負うマクベ

スのごときもの、この出雲の態度に對して、憤恨痛激の辞なきをえんや。かれの第一の幽霊に對するよりも、第二の幽霊に向かつて切齒罵詈ばりの語多きは、まさにこれのためなり。しかも、同一の幽霊が随意にきたり、かっけに去り、思うままにかれを嘲弄するがためなり。ゆえに、余はナイトの説に反して、変ずる者は幽霊にあらずして、かえつてマクベスなりと断ず。

両個の幽霊をもつてともにバンコーなりと認むる者あり。ダイスおよびホワイトこれなり。ダイスいう、stage direction は元來単に俳優の注意のために設けたるものな

り。ゆえに、もし沙翁をしてダンカンとバンコーと兩人の亡鬼を登場せしむるの計画ならしめば、最初より混乱の憂いなきよう明記すべきはずなりと。余はこれに対して、しかあるべしというのほか、一辞を付加するあたわず。ホワイトの説にいたっては、諸家の評論中もつと耳を傾くべきものと思惟す。いわく、マクベスの心を苦しむるものはバンコーにほかならずして、幽霊の出現するはマクベスがバンコーの事に説きおよぼしたるのちにある。第一の幽霊のバンコーなるや疑いをいれず。第二もまた同人なること明白なり。マクベスのバンコーを殺す

や、遠く時日を隔てず、したがって当時かれの心を支配するものはバンコーなり。かつ、かれは衆人の疑念を晴らさんとて、ことさらにバンコーを過賞せる際に、幽霊の突如として現わるるによつてしかるべしと。ホワイトの説簡にして要領を得たり。余はたいたいのうえにおいて、その説に同意するにちゆうちよせざるものなり。今これを詳論せんとす。

バンコーの怨鬼えんきは、ただかれがマクベスに謀殺せられたりという単純なる理由によりて、形をあらわすにあらず。もしこれをもつて幽霊の出るに相当の理由なりとせ

ば、ダンカンの怨霊もまた同等の権利をもつて登場濶歩かつぽしうるはずなり。されども、沙翁はバンコーの怨鬼を出すまえにあたりて、周到なる用意を整えたり。少なくとも余の目に映ずる悲劇マクベスにおいては、単なる殺虐以外に興味多き心理上の手順を踏めりと思う。マクベスの三個の凶漢を使嗾しそくして、バンコーをみちに要撃するや、バンコーは当日の夜会に臨まんとして城外まで馬上にて乗りつけたるおりなり。域内にては謀殺の主人宴を張りて大いに群臣を饗す。群臣を饗するのマクベスは、凶漢のすでにおのが命を果たしえたるやいなやを知らず。心



中の煩悶知るべきのみ。しこうして、その煩悶の焦点はバンコーにあるや言をまたず。宴すでに開く。刺客きたりて戸外に立つ。マクベスその面上に一点紅あるを認め、ていわく *Tis better thee without than he within* と。かれは当夜の宴にバンコーの顔を見ざるを欲し、かつその策のなれるを聞きて、ようやく安堵の思いをなす。苦悶の雲まさに収まる。宴すでに開く。マクベス立ってバンコーの座にあらざるを惜しみ、衆に向かつていう。

*"Here had we now our country's honour roof'd,  
Were the graced person of our Banquo present;*

Who may I rather challenge for unkindness

Than pity for mischance."

これあきらかにバンコーのこの席にきたりうるべからざるを予想して、その心事をさかさまに放射せるものなり。この時にあたって、かれの念頭はもとよりバンコーを離れず。しかも、バンコーを再び見るのおそれなきを信ず。しこうして、ことさらに堂上の臣僚を欺瞞せんがために、かれが欠席せるためせつかくの興味をそぐを<sup>どど</sup>呶々す。この時にあたりて、幽霊あり音なく室に入り、声なくしてマクベスのイスに座す。とせば、その幽霊は

かれが副意識のもとに埋没せるダンカンの幽霊と見るべきか、はた寸時もかれの念頭を離れざるバンコーの幽霊なるべきか。事實はしばらくおく。これをダンカンの幽霊とせば、興味のとみに索然たるものあらん。じゅうぶんに諸人を瞞まんちやく着しえたりと信じたるマクベス、また万々バンコーのこの室に入るの道理なしと思いつめたるマクベスが、かのれの席に復せんとしてぶり向けば、居るべからざるバンコーが、居るべからざるおのれのイスに冷然と端座しつつあるを見て、悚しょうぜん然たる寒慄かんりつの念は、マクベスより伝染して一般の観客に電気のごとく感動を与

うべきなり。友を殺し了し、臣を欺き了したりとうぬぼれたるかれは、劈頭第一へきとうに幽霊より翻弄せられたるなり。幽鬼すでに去つて波瀾ようやく収まる。マスベス思えらく、今度こそ安心ならんと。再びさきの瞞着手段に訴えていう。

"I drink to the general joy o' the whole table,  
And to our dear friend Banquo, whom we miss;  
Would he were here!"

と、かれの念慮は、なおバンコーを離れざるを見るべし。かれ剛腹なるかな臣僚を愚弄せんと欲するを見るべし。

しこうして、その他を愚弄せんと欲する裏面には、一点得意の気あるを認めうべし。得意の気わずかに機微に発するとき、忽然としてその鼻梁びりようをくじくの幽霊は、再び登場しきたるなり。マクベスの憤怨ふんえん知るべきのみ。余はいかにこれを解釈するも、再度の幽霊をもってダンカンと思議するあたわざるなり。以上は余の第二問に対する解決なり。

(三)、最後に解釈すべきは、マクベスの見たる幽霊は幻怪とすべきか、また幻想とすべきかの問題なり。客観的にほんものの幽霊を舞台に出すを否とするについて二説

あり。一は、この幽霊はひとりマクベスの目に触るるのみにて、同席の他人の瞳孔どうこうに入らざるがゆえに、なんびとの眼にも映ずる実物を場に上すは、当を得たるものにあらずとの考えなり。クラーク、ケンブル、ナイトの諸人これを主張す。一はこの幽霊たる単にマクベスの妄想より捏造ねつぞうせられたる幻影の一塊にすぎざるをもつて、これを廃すべしとの意なり。第二の幽霊について、ハドソンこれを固持す。第一の説は理において妥当なるも、これを廃したりとて感興を引くの点において必ずしも実物の幽霊にまさらず。しばしば言えるごとく、この劇の中

心はマクベスなり。マクベスに対する観客の態度は、マクベスと列席する臣僚の態度と同じからず。吾人はこの中心点なるマクベスの性格の発展を跡づけんことを要す。ゆえに、われら観客はマクベスの臣僚よりもマクベスに密接の関係ありて、またかれらよりもいつそうマクベスの心裏に立ち入るの権利を作者より与えられたるものと仮定して可なり。吾人の劇を見るや、劇を見るのまえにあたってあらかじめこの仮定を認識せるものなり。ゆえに、この点より論ずれば、一座の人に見るあたわざる幽霊が、観客の目に入りたりとてふつごうなき訳なり。

また、第二説に對しては、余は下のごとき意見を持す。文学は科学にあらず。科学は幻怪を承認せざるがゆえに、文学にもまた幻怪を輸入しえずというは、二者を混同するの僻論へきろんなりと。されど、文芸上読者もしくは観客の興をひきうると同時に、また科学の要求を満足しえんには、なんびともこれを排斥するの愚をなさざるべし。ただ単に科学の要求を満足せしめんがために詩歌の感興を害するは、これ文芸をあげて科学の犠牲たらしむものと言わざるべからず。マクベスの幽霊は科学の許さざる幻怪なるがために不可なるにあらず、幻怪なるがために興



味を損するがゆえなりと言わざるべからず。科学の許す幻想なるがために可なりと説くべからず、幻想とせば幾段の興味を添えうるがために可なりと論ずべし。しこうしてこの光景にあつて実物の幽霊を廃するとき、劇の興味上なんらの光彩を添えずして、かえつてこれを減損するのおそれあることまえに述べたるごとくなれば、余はこの幽霊をもつて幻怪にて可なりと考う。もしくは、マクベスの幻想を吾人が見うるとし、その見うる点において幻怪として取り扱つて不可なきもの<sup>めいちよう</sup>と考う。第三の問題に関して、いま少し詳論のうえ明暢なる解決をな

さんと思えど、時日乏しくして遺憾ながらその意を得ず、  
行文思想とも蕪雜ぶざつなり。読者推読あらんことを希望す。

(十二月十日釈稿)

(明治三七年一月十日『帝国文学』)





日本文学電子図書館

---

マクベスの幽霊について

著 者：夏目漱石

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石全集」第3巻  
春陽堂書店

1965年8月31日 初版発行

日本文学電子図書館